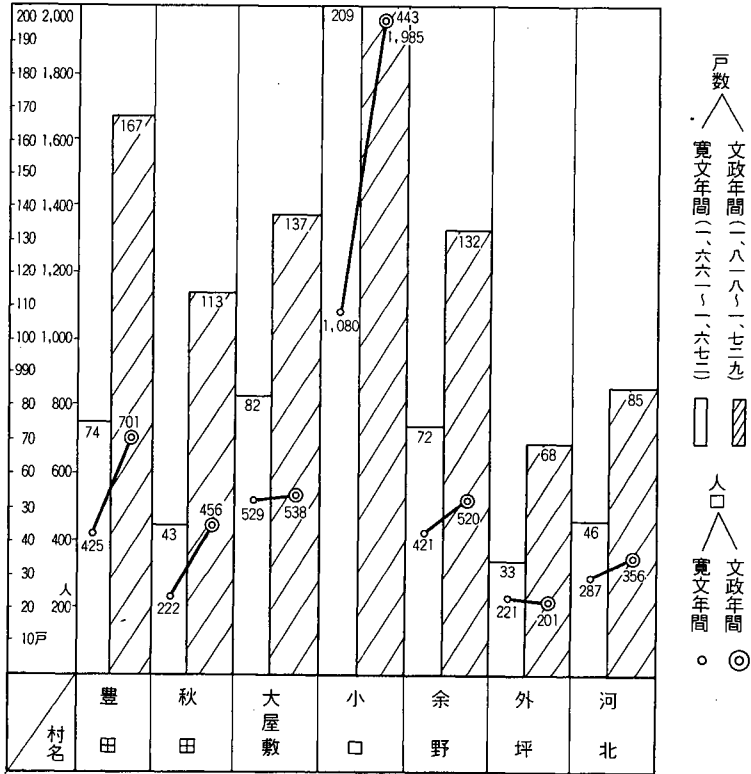


表2-9 藩政時代における戸数・人口の推移



(この表は現在の地域(大字別)に集計したものである)

第二節 新 田 開 発

概 況

尾張平野は江戸時代になると、水田を中心に農地の開発が活発になり、農地の約三〇パーセントはこの時代に開発されたといわれる。

ことに近世初頭、これが急激に実施されるようになった。すなわち慶長（一五九六―一六一五）年間の全国石高一、八〇〇万石であり、元禄（一六八八―一七〇四）年間には二、六〇〇万石に激増していることをみても、この事業がいかに活発であつたか明瞭である。

これは耕地からとれる貢租を、経済の基盤とした各藩の重要施策によるもので、農業生産力の向上を目ざすとともに、貢租の増加をはかつたものである。

尾張藩では、開発の増大にともなう水不足、あるいは農民の不足を補なう策として、色々な施策を講じた。なかでも享保七年（一七二二）の新田高札、同一年（一七二六）の新田検地条目は、新田開発による多くの問題を解決するとともに、新しい村づくり成立の基礎となった。

しかし一方においては、本田の荒廢、林野の伐採による河川の氾濫も各所で発生し、これらを除去するために江戸時代の後半、文化三年（一八〇六）になって一時は開発を禁止する処置をとつたといわれる。

◎新田高札（享保七年 一七二二） 〓新田開発にあたって人集めの策

「他国・他領の百姓であろうと、またいかなる重罪を犯した者でも、開墾に従事する者は、その罪を免除する。」

当時、尾張藩では百姓の離村・逃亡をきびしく取締っていたが、これは要するに、「出て行くことは」許さないが「入ってくることは」だれでも良いという策といえよう。

こうして新田の多くは開墾事業を起してから、普通の場合二か年のあいだは作取り、諸役が免ぜられ、その後、所定の「検地（縄入れ）」が実施され、はじめて石高が算定され村高に編入されたが、大きな新田は一村を組織した所も多かつた。

大口町においてもこのような歴史の中で、多くの新田が開墾されているが、その方法・経緯は種々である。またその年代も同一ではないが、多くは寛文（一六六一—一六七二）年間に検地が行われ石高が設定され、村高にほとんど繰入られている。

また町内の新田が入鹿〇〇新田、入鹿出新田というように「入鹿名」がつけられているのは、寛永一〇年（一六三三）の入鹿池の構築、そして入鹿用水の開さくにより灌漑の便がよくなり、農作物の生産にもつとも好条件をそなえた地となり、これが新田開発の要因となつて、ますます多くの土地が開墾された。こうしたことから入鹿池の用水を灌漑とした地域、またこの時期に開発された新田を総称して入鹿とつけたものと考えられるが、一説に「入鹿」は入会地の借字で、これまで入会地であつた所をそれぞれの方法によつて開拓し新田とし、入鹿池・入鹿用水の完成の喜びを記念して入会に入鹿をあてたともいわれている。用水の受益地以外の新田（入鹿伝右工門新田）でも入鹿とつけられているところをみても、池の構築、用水の開さくがこの地にとつて期待と喜びがいかに大きかつたかを示している。

またこの用水の開さくにつづき、水不足解消のために開さくされたのが、慶安三年（一六五〇）に竣工をみた、木津用水であり、これが新田開発の進展にますます拍車をかけることとなつた。

こうして本町内における新田開発の基幹がつけられたのである。(入鹿池の構築、入鹿、木津用水の開さくについては別項で説明) 史料によると入鹿池の開発によってできた新田高はおおむね、慶安年間(一六四八—一六五二)(古木津用水が開さくされた頃)に約六、八四〇余石(本町分も含む)と記録され、またこの後の木津用水、新木津用水の竣工によって、丹羽春日井両郡にわたって八九か村、総高一万三千八百石余りとなったと記録されている。

当時の新田開発の主なもの、

(1) 村の事業としてのもの

(2) 個人の事業として資力のある人が、金品をだし開発にあたったものでこれらは人名のついた新田で一村立をしているものが多い。また古い文献によると大屋敷村、外坪村には、百姓が中心となって地域に接した荒地を開こんで新しく田畑としたと記録され、これは少しでも多くの土地を確保しようとしたものであると同時に貢納の強化に対する努力でもあったろう。このような開発は、「切添」とよばれ本田耕作の間に精を出したものである。古い村絵図(地図)の中でみる、子新田、亥新田など、干支名(エト)のついた新田がある。これはそれぞれ検地の年をあらわしている。

これらの新田は、本田とは区分され貢納も比較的低く、農民にとつては生活の大きな潤いとなっていた。

町内の新田について尾張御行記、村絵図を参考してみると、表1—5のようになる。

このように寛文二年寅年(一六六二)に検地され、一村立あるいは村高に繰入れられた新田は、この地方のなかでは多く、水利、地形など生産の条件に恵まれた地域で、長桜替地新田の二三町七反四畝を筆頭に、一六の新田におよんでいる。

切添新田は、大屋敷村、外坪村にみえ、延享元年(一七四四)の縄入れ以後の開発記録がない。これは前述のように

表2-10 新 田(寛文二年以前に檢地)

新 田 名	繩入年代	本田名	面 積	石 高
入鹿長桜替地新田	寛文二年		町反畝 23 7 4	石斗升 163 9 3
入鹿八左工門新田			5 6 1	55 1 8
入鹿宗雲新田			14 5 3	134 0 2
入鹿伝右工門新田			8 5 3	80 8 7
入鹿三右工門新田			7 0 7	69 2 7
入鹿又助新田			2 2 9	20 6 4
入鹿九郎右工門新田	寛文二年		9 7 1	93 1 8
小折入鹿新田			15 4 4	133 0 2
入鹿清右工門新田	寛文二年		3 4 1	28 4 0
入鹿新田	寛文二年	河北村	3 3 1	20 3 5
〃	〃	余野村	4 5	2 2 9
〃	〃	外坪村	18 1 5	173 2 0
三ヶ一新田	〃	〃	1 0 2	10 6 4
入鹿新田	〃	大屋敷村	5 6 7	54 2 5
入鹿出新田	〃	〃	1 5 6	13 6 8
入鹿新田	〃	御供所村	3 8 8	32 1 4
〃	〃	長桜村	1 9 3	19 1 3

入鹿伝右
工門新田

元和九年三月(一六二三)安良村(現江南市大字安良)の住人、佐藤伝右工門が、現在の大字秋田字郷裏(伝右、八王子社の辺か)に住居を構え、この辺りの荒地を寛文二年(一六六二)に至り大半を開発し、この地を入鹿伝右工門新田とよんだ。

表2-11 切添新田

新田名	本田名	繩入年代	開発された面積(田畑)	石 高
丑新田	大屋敷村	元禄十年	町反畝 3 6 8	石斗升合 20 2 6 1
末〃	〃	享保十二年	7 5	6 8 5 8
子〃	〃	延享元年	5 1 0	29 1 5 2
?〃	〃	元禄七年	5 0 3	44 5 6 0
午新田	外坪村	享保十一年?	5 6	5 9 4 2

藩政時代の後半になつて、本田の荒廃などを理由に尾張藩が、新田開発に消極的な施策をとつたためとも思われる。

つぎに村立をした新田について、その経緯が尾張徇行記には、それぞれつぎのようにならされている。

当時は戸数八戸、住人四十六人と記録され、のちの庄屋伝右工門は、開拓者の六代目にあたる人である。

元禄一四年（一七〇二）石高八十八斗七升七合、田地、七町八反六畝、畑地、六反六畝であった。現存する八王子社は元和九年四月（一六二三）に勤請され、旧里安良村八王子社の祭神八王子の神をここに移して祀ったといわれ、正保三年（一六四七）には本殿が建立されている。

・ 入 鹿 宗

寛文二年（一六六二）奥州の人小笠原宗雲（僧侶行者？）が諸国を行脚中、この地に来て現在の大字秋田字中山五九に祀られる熊野社の近くに住み、この社を修理するとともに家来の左右田弥次右工門、佐竹左太夫の二人とともに、この地の開発にあたった。

・ 雲 新 田

庄屋常右工門は、佐竹左太夫の未孫にあたる人でありこの地開発当時は、戸数六戸、住居人三十三人であったといわれ、元禄一四年（一七〇一）には石高百三十四石二升、田地、十二町二反七畝、畑地、二町二反五畝と記録されている。

・ 入 鹿 八 左

・ 工 門 新 田

一説に往古現在の知多郡の人がこの地に来て、荒地を開拓したというがたしかな資料はない。一方「尾張徇行記」によると、八佐工門と称する人が長桜村より、この地に渡り開発したとされる。また記録には、天明二年（一七八二）の大洪水により、田畑の被害大とするされ概ね長桜村の北辺に位置し、田畑は六か所に分かれていた。

元禄一四年（一六八六）の石高は五十五石一升八合、戸数五戸、住居人二十二人と記録されている。

入鹿清右

工門新田

古記録によると、石高二十八石四斗となっているが、その年代、開発者については明らかでない。一説によれば、現在の萩島の南西辺りの荒地を、西成村字熊代（現一宮市西成）の清右工門とよぶ人が開墾し、新田とし、この地を「くましろ田」とよんだといわれるが現在この名称は残っていない。

明治一一年一二月に小口村に合併しているが、当時の詳細を記する資料はない。

入鹿長桜

替地新田

この新田については、開発に係る資料を部落民で所蔵している人があるが、「尾張徇行記」の記載についてみると、新田開発者、安藤彦十郎直高は、紀伊ノ国（和歌山）田辺城主四万石安藤帯刀先生直次の子で、のち事あって浪人となり、慶安二年（一六四九）六月（また一説に正保四年（一六四七）に紀伊ノ国より尾州愛知郡古渡村（現名古屋市中村区古渡）に来て、同村の住人棚村熊造なる人と会い、のち熊造を棚村小十郎と改めさせ、直高の一子、安藤伊兵衛とともに丹羽郡長桜村に渡り、同村の土豪であった鈴木重任と会い、第九代鈴木重任の許を得、長桜村の南辺（現在の北替地辺りか）を開墾し、のちその範囲を広め現在の替地の郷域まで開発するところとなった。

開発当時この新田は、戸数十三戸、住居人四十七人、また元禄一四年（一七〇一）には石高百六十三石九斗二升の記録がある。

また古記録（某家所蔵）には、つぎのようにしるされている。

(一) 直高がこの地に持参した五輪塔が、明治初年までは、北替地の北部山中に祀っており、この地を村人は「五輪」とよんでいた。

(二) 直高が祀ったのは「五輪塔」で、これが現在大字大屋敷地内五条橋東側、通称安藤屋敷にある「しょうねん塚」

に祀つてある。

(一) 直高、開発地域が犬山成瀬領であつたがため、尾張藩主徳川義直に申出て小口村こぐちにあつた尾張領の一部と交換しこの地を「長桜替地新田」と称することとした。

(一) 直高、棚村小十郎直末に「アセビ山」(現替地部落東南)の地、約十町歩、さらに慶安元年(一六四八)ごろ、曾本村の一部(江南市曾本)、長桜村の通称「火走り」の辺りを開拓させこの地を直末に与えた。この時直高の所領地は、北・南替地、火走り、曾本の一部を併せて約一〇〇町歩であつた。

(一) 直高、延宝三年(一六七五)没し、直方があとをついだ。

※ 直高には直方、直嗣、直成、直年の四子があつた。

(一) 直嗣は、長桜村鈴木重任に養われ一家をなし、長桜村安藤家の祖となる。のち大屋敷村の一部を開拓する。(現在の大字大屋敷通称安藤屋敷辺りとも考えられる)

※ 鈴木重任(長桜村土豪)

(イ) 代々喜太郎と号す

(ロ) 先祖は河内ノ国の浪人

(ハ) 大森氏(奈良子)の祖先と伝わる小森三省とともにこの地へ来たか。

※ 現在、替地にある中野姓、鈴木姓、稲山姓は享保年間(一七一六―一七三五)に大赤見村(現在一宮市)より中野氏が、入鹿村(現小牧市)より鈴木氏、稲山氏が移住して来たと伝えられている。

概

況

大口町における用水灌漑開発の歴史は古く、先人の努力により豊かな水が供給され、地域住民の生活に、また農業生産に、そしてこれが地域開発の基礎となり、今日の豊穡の地をつくりあげたのであろう。

第三節 用水の開発

域が東、西に区分された。こうして従来この地が低地のところへ、さらに周囲に高い堤防が出来たために雨期には、何度も水害をうけたと伝えられている。



図 2-57 ニッ屋開村当時の図

・ニッ屋新田

この地は往古は、木曾川の支流であった所で、木曾川の築堤後、沼地となり原野であった所を、元和元年、今から約三百六十五年前、春日井郡水野村の権右衛門、久右衛門の兄弟が移住し開拓したところから、二家（ニッ屋）とよんだという。

当時の開拓面積など詳細は明らかでないが、寛文年代（一六六一〜一六七三）の頃の木津用水の築堤によって西側の地域と分断された。

さらに明治年間の名古屋上水道の完成により、この地

往時この地方は尾張氏の強大な力のもと、しだいに用水灌漑の開発がすすめられていたことは、多くの文献に示されておられ、昔の灌漑はもっぱら自然の河川を利用して、現代の如き整備された灌漑用の溜池や専用の用水路はなかつた。

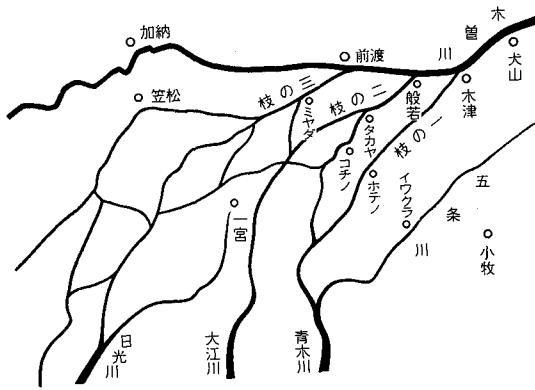


図 2-58 木曾川八流の図

天正一四年（一五八六）の六月に起つた大洪水のち、伊奈備前守による本格的な治水施策が実施されるにおよんで、木曾川の本流が現在の位置となり、その後尾張藩祖徳川義直による積極的な勸農施策により、多数の農民が不毛の地の開発に力を注ぐところとなり、これがやがて灌漑用水の開さく、整備を一層必要なものとしたのである。

本町にかんする用水の開さく、整備についてしるすとつぎのようである。

〈用水〉 1 木曾川 2 入鹿池 3 木津用水

4 新木津用水 5 入鹿用水 6 五条川

木 曾 川

往時木曾川は三十六の支流があり、本流から分れて尾張平野に流れ込んで沖積平野を形成した大きな流を、一の枝・

二の枝・三の枝とよび、一の枝が小口・御供所の辺りを流れていた。中世以前は洪水のたびにこれらが氾濫したと歴史はしるしている。

まず(1) 文禄三年（一五九四）に秀吉が木曾川の築堤を計画し完成し